

法号 安政六年巳未三月廿三日

とくよくはいらくしぎせんほうし
徳譽恢郭子儀善法子

俗名 市川海老蔵

行年 七十歳

辞世

ちるときに

顔を崩さぬ

様にかれ

寿海老人

近蝶

三緑山中

あかん堂

常照院

ふきられて行もつめたき別れかな 藤

ひし／＼と花さへ見せず桜の葉 梅竹

起ぬは眠にしはつゝや若楓 新車

本番も昇かみたまへ菊の花 翫雀

ちる花のなきをうらみや菊のはな 三猿

菊のはな／＼花に鐘芝さへ／＼菊の夕かな 米升

花の木のすき間や／＼池の水明り 廣や

手さはりも／＼ゆかしき様の／＼柳かな 是好

一様にくれ静まりぬ／＼菊のはな 我童

遠のいて淋しさを／しる桜かな 紫扇

○

鳴さした■濁りへ／かくれけり 狂言作者治助

■之のさくらにゆめても／なかりけり ■華

※(※一行裁断にて見えず)

なつかしき 新七

○

新春も三筋は消へす／魚の腹 香以

戸叩くも近所てはなし／春の夜 文升

花咲ておなし夜のなき／木の間くれ 若海

○

更るほど動かぬ空や／■月 豊国

田の水もひとあかり／なり花の中 国芳

日もすから杜にの花の／すはりけり 芳年

猿若笛連

散る人を見て／ちりやみぬ夕さくら 長左衛門

白川のはなは霞けし／芥子花 長之介

夕ぐれのしごしものうし／花の止 望月卜清

寿海老人の／死をいたむ

身かはりに立しせがれも／蓮の葉の／半座をわけて

我を松王 三代目一九

弥生吉日採華夫